



Title	Česnulytė, Eglė. 2019. Selling Sex in Kenya : Gendered Agency under Neoliberalism. Cambridge: Cambridge University Press, 2019, x+192 p.
Author(s)	木村, 香純
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2024, 35, p. 285-289
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95334
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【書評】 Book Review

Česnulytė, Eglė. 2019. *Selling Sex in Kenya : Gendered Agency under Neoliberalism*. Cambridge: Cambridge University Press, 2019, x+192 p.

木村 香純*

KIMURA Kasumi

本稿で紹介する Česnulytė, Eglė, “*Selling Sex In Kenya: Gender Agency Under Neoliberalism*” はケニア共和国が舞台である。ケニアは東アフリカに位置する、いわゆる「グローバルサウス」に属する国である。本書では、新自由主義の実践とイデオロギーが女性の「主体性」をどのような方法で、またどの程度規定しているか、同国のセックスワーカーを事例に検討したものである。

ケニアにおけるセックスワーカーに関わる学術的研究は 20 世紀の後半から現れ、それは主として人類学分野のものであった。その後、2000 年代初頭のケニアにおける HIV/AIDS パンデミックの発生により、セックスワーカーの存在を「病を拡大させる社会問題」として捉える研究が増加した。著者はこれまでの研究には大きく 2 つの問題点があると指摘している。第一に、これらの研究がセックスワーカーにならざるを得なかった女性たちの背景にある社会・経済の構造的な要因を説明していない点である。女性たちがセックスワークを選択した理由は「個人的な」問題として捉えられる傾向にあった。第二に、研究者が恣意的に集めたセックスワーカーの「語り」をあたかも全てのセックスワーカーに当てはまるものかのよう述べてきた点である。著者は 2010 年 10 月から 2011 年 5 月、そして 2015 年 12 月から 2016 年 1 月にわたってケニアの首都であるナイロビ及びケニアの沿岸部の都市であるモンバサで調査を行った。著者はこれらの調査を通して得られた成果を数本の論文¹として刊行しており、本書はそれらの研究の集大成である。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域研究専攻 (Division of African Area Studies, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University)

¹ 本書の出版以前に刊行された論文としては次のものがある。Česnulytė, Eglė. 2015 “‘I Do Not Work: I Do Commercial Sex Work’. Ambiguities in the Discourse and Practice of Selling Sex In Mombasa, Kenya.” *Development And Change* 46 (5), 1159-1178; Česnulytė, Eglė. 2017 “Gendering the Extraverted State: The Politics of The Kenyan Sex Workers’ Movement.” *Review of African Political Economy* 44 (154), 595-610.

以下に本書の目次を示した上で、本論にあたる第2章から第8章の内容を概観する。

第1章（序章）：ジェンダー化された新自由主義とセックスワーク

第2章 ケニアにおける新自由主義改革とジェンダー

第3章 ジェンダー化された生活と「家父長制との交渉」

第4章 モンバサでセックスを売る

第5章 セックスを売る女性の「夢」と戦略

第6章 悪質な循環：仕事に関する危険とセックスワークを辞める際の障壁

第7章 グローバルとローカルにつながる：ケニア政府、NGO、セックスワーカーの活動

第8章 結論：新自由主義世界でのジェンダー化された主体性の制限

第1章では、本書で用いた専門語彙の定義や説明、そして調査地及び調査対象、調査方法を概観している。ここでは、本稿でも繰り返し用いている「セックスワーク」(Sex Work) 及び「セックスワーカー」(Sex Worker) という用語について述べる。これらの用語を著者は20世紀後半の当事者たちによる草の根運動の議論を引きながら、慎重に定義している。セックスワークとは自身の「性」を金銭と交換することで収入を得る様々な労働を指す。また、セックスワーカーという用語を、労働の一形態としてセックスワークに従事する個人を指すものとして用いており、社会的アイデンティティではないということについて注意を促している。そのため本書では一貫して、しばしば否定的な意味合いを持ち、女性の特定のアイデンティティや心理的特徴を意味する「売春婦／娼婦」(Prostitute) の語彙を用いていない（この書評においても同様の立場を取り、すべて「セックスワーク／ワーカー」とカタカナで表記した）。さらに、著者はセックスワーカーという用語の使用が、セックスワークにおける「労働的側面」を認識させ、従事する個人に対してスティグマや汚名を着せることを避ける、より適切な語であると主張している。しかし、著者は、このセックスワークという用語の使用をめぐっては現在も議論が存在していることを指摘することも忘れていない。

第2章では、ケニアにおける新自由主義政策の実施がケニアの経済、労働市場そして女性たちに与えた影響を探り、なぜ女性がセックスワークを現金獲得の手段として選択せざるを得なかったのか、を中心に論じている。ケニア政府は1980年に構造調整政策

を受け入れた。さらに、1990 年代初頭からの同政策の本格化とともに新自由主義的な政策・措置の数々を講じ、「性別化された雇用不安」(gendered precarity)を助長させたという(p. 32)。それは、すなわち新自由主義下の新しい経済実態において、「伝統的な」社会のネットワークや家父長制と共にあったセーフティネットはもはや女性が頼れるものではなく、これらから落ちこぼれた女性は労働市場に参加する他なくなった。しかし、経済の実態が変化した一方で、ケニアにおけるジェンダー規範の多くは変化していない。そのため、今日までケニアの女性たちには概して低賃金で不安定な職業の選択肢しか与えられない。そこで、セックスワーカーとなった女性の多くが、著者の聞き取り調査に対して「収入を補うため」さらには「それらの仕事から逃れるため」にこの仕事を選択したと回答したという。

第3章では、ケニアのナイロビに住むセックスワーカーの女性たちが、家父長制的な構造とどのように「駆け引き」(Patriarchal Bargain)しながら生計を立てているかを論じた。第2章で論じたように、現在のケニアにおいて、家父長制と共にあった女性に対するセーフティネットはもはや機能していない。しかしながら、社会制度としての家父長制はいまだケニアに深く根付いている。そのような状況において、女性たちはいかに、家父長制と「駆け引き」をしながら生計を立てているのか。セックスワークはナイロビにおいて女性が生計を立てる「極端な」方法の1つであり、家父長制との「駆け引き」を視覚的に見ることの事例でもある。著者は、セックスワーカーが男性客の「欲望」(desire)を見定めて、自身の言動や行動、外見を調整しながら、自らの設定した目標を達成しようとしていることを明らかにした。

第4章ではケニアにおけるセックスワークをはじめとするあらゆる「性産業」(sex industry)に新自由主義が与えた影響に焦点を当てた。著者によれば、新自由主義の思想は性産業にも既に浸透しており、女性間の不平等を生み、強化し、顧客をめぐる競争を激化させる要因の1つとなっていると論じた。

第5章では、セックスワーカーたちが語る「夢」(dreams)を調査し、彼女たちがどのような戦略や計画を持ってその夢を達成しようと試みるのかを論じた。セックスワーカーたちの夢というのは、「お金持ちと結婚をすること」や「ビジネスで成功すること」、「NGO セクターで働くこと」などである。これらの夢を達成するために、彼女たちは「戦略」を立てる。具体的には、セックスワークで稼いだ収入と支出のバランスを上手く取りながら、より収入を多く得るためにより客が好みそうな服装をする。さらには、

チョコレートやシャンパンといった特定の商品にまつわる価値観や意味を、自らのサービスを売り込むために利用していたことを明らかにした。

第6章では、第5章において論じられたセックスワーカーたちの「夢」が、直面する現実とはしばしば対照的となってしまうことを論じた。著者はこの原因として性産業特有の困難を挙げ、その困難を調査することを通じて多くのセックスワーカーが「夢」や「良い生活」を実現することが容易でない理由を考察した。例えば、金払いの良い客を見つけるために、そのような客が集まる場所（高級なホテルのラウンジやバー）に出入りするための入場料や着飾るための服に、稼いだ金を投じる必要がある。そして、働く中で収支のバランスを取ることができず、セックスワークを辞めるための資金を貯蓄できないケースが往々にして発生する。また彼女たちには、望まない妊娠の可能性（p. 133）やアルコール・ドラッグへの依存（p. 135）、HIV/AIDSに感染する危険（p. 138）などが常につきまとう。このような困難のために、自身が思い描く「夢」や「良い生活」を達成できるのは、セックスワーカーのなかのごくわずかの女性となってしまうという。

第7章では、セックスワーカーである女性たちがセックスワークを止めたいと感じた際／止めた後に利用できるいくつかの選択肢について論じた。ケニアには3つの支援のアクター、すなわち、ケニア政府、NGO、セックスワーカー自身の草の根団体が存在する。この章ではこれらアクターがセックスワーカーたちをどのように支援し、彼女たちにセックスワーク以外のどのような現金獲得の選択肢を持たせるかを検討し、さらには各アクターが持つ問題点を指摘した。

第8章では、これまでの議論を総括する形で、ケニアでセックスワーカーの女性たちの生活に新自由主義が与える様々な影響を改めて論じている。既に述べているようにケニアにおける新自由主義は女性が生きるために性売りを余儀なくされる状況を作り出していた。それは新自由主義の「(労働)市場における『自由な選択』や『主体性』」の結果では決してないことを、著者は繰り返し強調している。

以上、本書の内容について各章ごとに要点を説明してきた。次に、本書の意義を2点挙げたい。第1に、ケニアでは違法行為であるセックスワークに従事する女性たちから半構造化インタビューを通して得られた語りを、著者の主張の根拠とするデータとして活用している点である。定量化したインタビューの内容を駆使して、女性たちが置かれている状況を新自由主義の理念や実践がもたらした影響、というダイナミックな視点を持って描き出すことに成功している。第2に、セックスワーカーの存在を感染症を拡大

させる「社会問題」としてのみ捉えるこれまでの研究を批判し、女性たちがセックスワーカーという職を選択したプロセスやその背景にある社会・経済構造の問題点を中心に論じている点である。ケニアには、「女性が好んでセックスワークという職を選んでい」という言説がいまだに存在している (p. 155)。繰り返しになるが、セックスワークに従事する女性たちの多くは、より良い現在、そして未来のために戦略的に選択しているのに過ぎない。そして、そのような状況は新自由主義に基づく政策の数々に端を発するものである。著者が新自由主義の大前提となる「個人の自由と選択を促す」という思想の浅薄さ、そしてその偽善性に女性たちの声でもって疑問を投げかけている点は非常に重要であろう。

一方で、問題点を挙げるならば、本書を特徴づける彼女たちの語りに対する筆者の分析の中に見出すことができる。本書上で直接引用されているインタビューを通して得られた女性たちの発言の中に「新自由主義」といった用語はもちろん登場しない。彼女たちは自分たちがおかれている生活状況にそのような概念が何らかの効果を発揮したとは決して明言していない。女性たちは、自身がセックスワークを選択した主な理由に、貧困、教育の欠如、家族の対立といったものを原因として挙げていた。また、本書では、統計的資料をあまり用いていない。これまでになかった研究のアプローチを行った本書の強みの裏返しとして、ケニア経済をより長期的な視点で俯瞰できる資料が用いられていないため、彼女たちの語りから新自由主義の実践や理念がもたらした実生活への影響を明らかにする、という本書の核が若干説得力の欠けるものとなっている。そのような資料を用いた上で彼女たちの発言を二次資料として援用することで、初めてこれらの語りを生かすことができるのではないだろうか。

とはいえ、以上の点によって、本書の学術的価値が減ずることはない。本書は、セックスワーカーの女性たちのインタビュー内容をそのまま掲載することで、彼女たちを「受動的な被害者」として描いてきたこれまでの研究とは一線を画す研究となっている。彼女たちの声は、構造的な不平等や抑圧的な社会規範に直面し、理想とする「夢」を叶えることができないとしても、女性たちが日々どのように人生を切り開いているかを読者に鮮やかに示すものである。本書は政治、経済及びジェンダーに関わる研究分野に貴重な貢献をし、個人の主体性と構造的制約の間の複雑な関係についての洞察を提供している。